

～ 地方での独自性の発揮 ～

4 時を記憶する空間

～よみがえる廃校「アルテピアッツァ美唄」～



磯田 憲一
ISODA Kenichi

財団法人北海道文化財団理事長
NPO法人アルテピアッツァびばい代表

衰退が顕著なかつての炭鉱都市。地域資源を用いて、地域の独自性と新たな価値観を見出すことが求められる中で、街なかに残る廃校を美術館として再利用し、地域の活性化を目指したアルテピアッツァ美唄。その地域とアーティストとの出会いとは…。

小さな街の挑戦

北海道・石狩平野の東端に位置する人口27,000人の美唄市。石炭産業の衰退にあえいできた街で、アートによる地域再生の取り組みが進んでいる。廃校跡地に彫刻家安田侃の作品を配置した「アルテピアッツァ美唄」。不思議な「場のエネルギー」を持つ空間は、訪れる人々の懐かしい記憶を呼び覚ます。心を和ませた人たちは「また来ます」と言いながら帰路につく。

「奇跡の場所」とも言われる、北海道の小さな街の挑戦である。

美瑛と美唄

冬を越え、北海道にやわらかな陽差しが戻ると、さまざまな雑誌で北海道特集が組まれる。ある女性誌の北海道特集で「札幌・美唄・富良野」という見出し文字が躍っていた。一瞬、「美瑛」の誤りではと思

わせるが、勿論誤植などではない。人気がある美瑛も紹介されているのだが、見出しは、まぎれもなく「美唄」と打たれていた。美唄の知名度は富良野や美瑛に比べると格段に低いのが現実だが、アルテピアッツァ美唄の存在によって女性誌の見出しを飾ることになった。

芸術と自然との融合を目指して17年余り、この場所の成長に関わってきた者としては、感慨深い特集記事の見出しだったのである。

炭鉱都市の栄枯盛衰

美唄市は、豊かな田園風景の広がる道内でも屈指の穀倉地帯にあるが、かつて日本のエネルギーを支えた産炭地として栄え、その開発の歴史は明治初期にさかのぼる。大正初期に石炭生産が開始され、終戦後も飛躍を続け、人口も1956年には92,000人を数えた。しかし、1960年代前半からのエネルギー革命の流れは押しとどめようもなく、1973年には、美唄市から全ての炭鉱の灯が消えることになった。石炭産業の栄枯盛衰は、美唄の歴史そのものであり、石炭の灯を守り続けた炭鉱マンは、その多くが心ならずもこの故郷を離れざるを得なかった。

炭住街として栄えた地域に、1949年5月に開校したのが市立栄小学校である。ピーク時には1,250名が在籍していたが、時代の変遷の中で1981年3月に閉校されることとなる。1968年から併設された栄幼稚園は、引き続き校舎の一部を使用しているが、美唄市にとっては、閉校後の校舎をどう有効活用するか模索が長く続くことになった。



写真1 立ち並ぶ、かつての炭住（炭鉱住宅）と栄小学校



写真2 子どもたちの歓声がこだまする流水路と石舞台

彫刻家安田侃と芸術広場

一方、美唄に生まれた安田侃は、東京藝術大学大学院彫刻科を修了して、イタリア政府招聘留学生としてイタリアへ渡る。以来、ピエトラサンタにアトリエを構え創作活動を続けてきた。安田はこれまでミラノ、ヨークシャー、フィレンツェなどの彫刻展を成功させて世界的な評価を得てきたが、とりわけ2007年秋に開かれた「ローマ展」の成功は、これまでの評価をさらに確固たるものとした。安田はイタリアで出会った運命の素材である大理石について、「1年のうち4ヶ月も雪が大地を覆う美唄に生まれ、もしかしたらあの純白のイメージが残っていたので大理石の白を愛してしまったのかもしれない」と語っている。

炭都美唄で過ごした少年時代は、170mの地底から掘り上げられてくる、黒ダイヤとも言われた石炭の輝きを、その目と心に深く焼きつけてきたはずだ。安田をつき動かすことになったエネルギーは、こうした故郷美唄で刻まれた「記憶」から紡ぎ出されてきたに違いない。

アルテピアッツァ——イタリア語で「芸術広場」と名付けられた空間は、炭鉱住宅の跡地などを中心に広がっている。安田が日本でアトリエを探していた



写真3 懐かしさと未来が同居する旧教室ギャラリー

時に出会ったのは、雑木林の中にひっそりと佇む旧栄小学校の壊れかけた木造校舎だった。校舎の壁には、かつてここで学んだ子ども達の名札が切れ切れに残り、懐かしい記憶を今に伝えていた。25才で旅立った安田が久し振りに再会した故郷の風景。心を捉えたのは、エネルギー政策に翻弄された美唄の歴史など、全く知らぬげに無心に遊びまわる子ども達の歓声だった。この子ども達の笑顔こそ、故郷の歴史を未来につなぐ、かけがいのない財産なのだ。安田の心に沸きあがるものがあつた。「この子ども達が心をひろげることの出来る広場をつくろう」との思いが、アルテピアッツァ美唄創造への、小さな、しかし確かな灯となった。

廃校の再生

美唄市は財政も厳しく、政策の優先順位をめぐっては、さまざまな議論もあったはずである。だが、そうした議論を一つ一つ越えながら、故郷の生んだ彫刻家と共にアートによって地域の賑わいを取り戻す道を選び取った。こうして、アルテピアッツァ美唄は1992年7月にオープンしたのだ。70,000㎡を超す敷地には、重さ10数tの大作から旧校舎に置かれた小品まで、40点以上の彫刻がそれぞれの空間に溶け込むように置かれている。旧校舎の1階は今も市立栄幼稚園として使われているが、2階の教室はギャラリーに、そして雨漏りのひどかった旧体育館はアートホールとして再生された。アートホールはコンサートなどで活用され、置かれている彫刻群も聴衆の中にまぎれて耳を傾けているように見えて印象深い。

野外には大小さまざまな彫刻が点在するが、1994年にはイタリア・カッラーラ産の大理石で組立てられた幅18m、奥行き10mの石舞台が完成。その横の広場中央には、流水路と池が設けられた。流水路と池の底に置かれた玉石もイタリア産大理石で、1.5t



写真4 コンサートの聴衆でもある彫刻の並ぶ旧体育館



写真5 小高い丘の窪みにすえられた「天翔」



写真6 天と地に溶け込む「天聖」

も入るボックス80個分の石が運び込まれた。水の広場は、夏ともなれば子ども達の歓声であふれる。かつて炭住街を走りまわっていた子ども達の歓声と、無心に水遊びに興じる子ども達の声がどこかで混じり合い、アルテの丘に響く。それは人智の計算を越えた不思議な響きとなって私たちの胸を打つ。夏だけでなく、厳しい寒さと雪の季節でさえ、ソリ遊びに興じる妖精たちの歓声はこの地の天にこだまするのである。

奇跡の場所

安田はかつて「アルテピアッツァ美唄は世界でも稀な施設なのだ」と言ったことがある。当初、その意味を理解する人は少なかった。誰もが「日本にも世界にも、数多くの彫刻美術館があるではないか」と思い、どこにでもある廃校跡の再利用程度と受けとめたに違いない。アルテピアッツァ美唄がスタートして17年。今、多くの人が、その言葉の意味に納得しはじめている。

世界には著名な彫刻家の作品を集めた公園は幾つもあるが、一人のアーティストの彫刻公園が、未来に向けて創り続けられている空間は稀有に等しい。しかもアルテピアッツァ美唄は、安田作品が展示されている公園というより、広大な空間全体が安田の作品という見方がより妥当だろう。

緑濃いアルテピアッツァは自然そのもののように見えるが、決して自然そのものではない。ここは、かつて暮らしの場として活況を呈し、そしてそこにぎわいが、うたかたのように消えていった場所なのである。アルテピアッツァ美唄で最も人を惹きつけている「天翔」のある丘とて、ようやく撤去した公営住宅跡地に、3年をかけて建設残土を盛り上げて造られたものだ。

安田は時が自然を再生することを信じ、彫刻がこ

の風景の中に融合することを願いながら、アートを通じて心の“にぎわい”を取り戻していくという壮大な地域再生の旅にチャレンジしている。

「また来ます・・・」

ある学会のセミナーがアルテピアッツァ美唄で開かれ、ガイド役を務めた安田は、旧校舎2階のギャラリーの壁に残されている名札の前で「いつだったか、ギャラリーで涙を流している人がいて、彫刻を見て感激しているのかと思ったら、自分の名札を見つけて、懐かしくて涙を流していたんだ。この名札には負けるよね」と言った。それは負け惜しみではなく、時を越えてきた名札に対するアーティストとしての素直な思いだったに違いない。涙した人は、アルテピアッツァ美唄という「場」に引き寄せられながら、自らの内にある懐かしい過去にめぐり会って涙した。その循環がこの場のエネルギーをつくりだしているのだろう。

また、流水路にある「天聖」や「天沐」の前で安田は、「天と地をつなぎ、大地に微動だにせず立っている石と、たえず流れている水。石と水の間にあるわずかな空間が『天と地のはざま』なのです」と説明した後、「そんなもってもらしい説明をしても、子ども達にとっては単に水遊びをする場所。でもそれでもいいんじゃないか」と言う。作品名や作家名を記すことなく「見て触る人たちが何かを感じてくれればそれでいい」という「彫刻家安田侃」の真骨頂とも言っている言葉である。

留学後の安田は次々と野外彫刻展を成功させてきた。ミケンランジェロを生んだルネッサンス発祥の都市でも評価は高く、幾つもの作品が永久設置されている。そうした評価と比例するようにアルテピアッツァ美唄も、第9回井上靖文化賞や第15回村野藤吾賞を受賞した。そうした高い評価を得てもなお、安田の



写真7 「天沐」。過去、現在、未来の自分と静かに向き合う



写真8 「妙夢」。静かな時を刻む雪の季節

心を動かすのは、ギャラリーに置かれた雑記帳に記されている「また来ます」という言葉である。安田はこうも語っている。「雑記帳に書かれた『何もない、誰もいない、ただ涙が流れます』には、日本人の感性の優しさを感じる。炭鉱に生きた人々の断腸の思いが栄小学校には詰まっている。それをここに来た人が感じて、眼に見えない優しさが育ちはじめた」と。

アルテピアッツァ美唄の価値は、来訪者の数などでは決して推し測れない。安田はかつて「例え年間たった2人の人間でも本当に感動してくれたらそれでいい」と言ったことがある。この匂い、この音、この色、訪れた人が「懐かしい」と思わず感じるような空間づくりと云えばいいだろうか。過去、現在、未来の自分と静かに向き合うことの出来る場所。安田侃と安田の思いに共感しこの地を愛する人たちの挑戦が、日本の北の小さな街で続けられている。

NPO法人の設立

2005年8月、NPO法人「アルテピアッツァびばい」が設立された。安田の思いを受けとめながら、厳しさが募る中での困難を抱えたスタートであった。何しろ、数千万円に及ぶ年間維持費や人件費を入場料を取ることなく、会費や寄附金などで賄おうというのだから。しかし、そうではあったが、同時に希望の船出でもあった。これまでの、経済的発展の中でつくられてきた物差しを越えて、豊かさの新しい基軸を創造しようという旅のはじまりであった。安田はイタリアで大理石という素材にめぐり合った。そして数十年後、今度は故郷で「北の大地」という素材を得た。一方私たちは、そのたぐいまれなアーティストに出会い、数や量で計るのではなく、心に沁みる豊かさの創造にむけた壮大な実践の戦列の中にある。その、金銭ではあがなうことの出来ない喜びは例えようもない。ここで働く喜びを心の内にして、

優しい眼差しで来訪する方々を迎えるスタッフの存在も、アルテピアッツァ美唄の持つ味わいにも似て、運営を担う一員としての誇りでもある。

アルテ市民

安田はNPO設立の席で「世界一の彫刻美術館をつくりたい。世界一の基準は何か。面積なのか、彫刻家の数か、作品の質か、入場者の数か。そうではなく何を感じてくれたかを評価の基準にしたい」と語った。これまでの数の論理に翻弄されることなく、新たな価値を創造していきたいという心からのメッセージであった。

一方現実問題として、アルテピアッツァ美唄の置かれた状況は決して容易なものではない。会員や寄附も思うにまかせない。自治体の財政も厳しさを増している。何よりアルテピアッツァ美唄に並ぶ彫刻群の多くは、安田個人の負担によって美唄市に寄託されているのが実態である。この世界的にも稀有な空間を未来にどう残していくか、私たちに課せられた喫緊の課題は多い。

安田は「ここに無いのはお金だけです」と言った。現実を踏まえた安田の率直な思いである。しかし、そうであってもなお、この言葉は何と希望に満ちた言葉であることか。アルテピアッツァ美唄の活動を支える人たちの思いがこの言葉の中に潜んでいる。行く手にはさまざまな壁があることだろう。だが、私たちは、日本にも世界にも稀な「アルテづくり」の道を、その戦列に加わることの出来る喜びを胸に、前を向いて歩き続けていこうと思う。

アルテピアッツァ美唄のキーワードの一つは「おかえりなさい」である。故郷を持つ人も持たない人も、ここを訪れれば「アルテ市民」の一員なのだ。

<写真提供>
アルテピアッツァ美唄